

2017年1月15日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 6章1～15節

説教：信仰と聖霊

はじめに

あるときペテロは、大祭司や律法学者たちにこう語りました。「あなたがたはナザレ人イエス・キリストを十字架につけて殺した。しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせました。」

我こそは神に仕え神の前に正しい者だと思いついてはいる彼らは、これを聞いてはらわたが煮えくりかえるほど怒り狂います。ことあるごとに使徒たちを捕まえ、尋問し、脅迫します。

しかし、教会は迫害を受けながらも心を一つにし、「みことばを大胆に語らせてください」と祈りました。その結果、教会に集う人たちが次々と加えられていった。それがこれまでのであらずじになります。

今日の箇所にはステパノが登場します。結末を先取りして言いますと、このステパノは裁判の結果、石打の刑を受け殉教していきま。なぜ彼は殺されなければならなかったのか。いったいどのような信仰者であったのか気になります。

1 ユダヤ人の言語の違い

1) 歴史的事情

ステパノのことは見る前に一つだけ確認しておくことがあります。今日の箇所には、二つのことが書かれています。前半は、教会で起きた食事を巡るトラブルのこと。そして後半では、リベルテンの会堂に属する人たちによって訴えられたこと。この二つまったく種類の異なる事件に見えますが、実は共通点

があります。

まず前半の箇所を見ましょう。1節に、「ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。」

日本人が日本語をしゃべるのがあたりまえのように、ユダヤ人も彼らの母語であるヘブル語をしゃべっていた。頭からそう思い込んでいますが、よく見ると実はギリシャ語を使っている人たちとヘブル語を使う人たちがいたようです。

なぜそんなことになったのでしょうか。それには歴史的な事情が深くかかわっています。イスラエルは小さな国です。何度も外国から攻められました。特にローマ帝国が攻めてきたときは勝てるわけがありません。負けてしまいます。ローマ帝国はイスラエルの主だった役人や特別な技能を持った職人などを根こそぎ自分たちの支配地に連れていき、強制的に移住させます。当時、負けた国はどこでもこのような屈辱的な扱いを受けたのだそうです。連れて行かれた人たちも一生懸命生きなければなりません。やがて子孫が生まれます。親が使っていたヘブル語は忘れられて現地のことばであるギリシャ語を使うようになります。

使うことばは変わってもいつかは故郷に戻りたい。それが彼らの願いです。時が経ってローマ帝国の政権が変わると移動の制限が緩くなり、帰国することができるようになった。その結果、同じユダヤ人でありながら、ギリシャ語とヘブル語を語る人たちの二

つのグループが形成されていきました。

2) 影響 ユダヤ教の場合

この影響はいろいろなところにも現れてきます。ユダヤ教ではどのように現れたのか。教会ではどのように現れたのか。この二つの視点から見ておきます。

まずユダヤ教の方から見ます。一つの例を挙げます。これは聞いた話です。ある大きな自動車製造工場で人手不足のために外国人労働者を連れてくることにしました。集まって来たのは主にブラジルから出稼ぎ者で、クリスチャンの方が沢山おりました。そこで困ったのは教会の事です。その町には日本人の教会もありましたが、ことばがわからない上に習慣も違う。どうしてもなじめない。自分たちのことばで礼拝できる教会が欲しいということになり、結局ブラジル人専門の教会ができたのだそうです。

ユダヤ人たちも同じでした。イスラエルに戻ってきたけれど、町の会堂に行ってもヘブル語で礼拝していてどうもなじめない。そこでギリシャ語をしゃべる人たちが集まる会堂をつくらうということになります。それが9節に出て来る「リベルテンの会堂に属する人々」のことでした。

3) 影響 教会の場合

話すことばの違いによる影響は、キリストの教会にも現れました。それが1節にある、食事の配給のトラブルです。教会には豊かな人ばかりではなく、貧しい人たちがやってきました。教会はその人たちのために食事の配給システムを作りました。人数が少ないときはきちんと動いていましたが、人数が多くなると目が届かなくなってしまう。ことば

の違いが壁になってコミュニケーションの難しさからトラブルが起きたのでしょう。その結果、使徒たちの所へ苦情が上がってきました。

2 教会

1) 信仰と聖霊に満ちていた人を選ぶ

この問題を受けて使徒たちは教会の主だった人たちを集め、対策を協議します。十二人の使徒たちだけでは手が回らないほど教会の規模が急速に大きくなってしまいました。体制を見直す必要があります。今風に言えば、礼拝伝道部門と食事配給部門を切り分けて独立させることにします。礼拝伝道部門は十二使徒が担当し、直時配給部門には新たに担当者を立てることにします。手の空いている人ならだれでもよいと言うことではない。信仰と聖霊に満ちた人でなければならない。そうやって七人が選ばれ、そのなかの一人がステパノでした。

2) リベルテンの会堂に属する者たち

彼は、早速ギリシャ語を話すユダヤ人から話を聞き、問題を解決する作業に取り組みます。最初は教会に来ている人たちだけとのつながりでしたが、次第に教会員の家を訪問するようにもなります。家に行けばその地域にはユダヤ教を信じている人たちが沢山住んでいます。そうやってギリシャ語を話すユダヤ人グループ、すなわちリベルテンの会堂に属する人たちと接触するようになります。

彼らはステパノに反感と憎しみを込めた質問をします。これに対し、ステパノは聖書のみことばをひもといいて丁寧に説明します。智恵と御霊によって語っていたので、彼らは対抗できなかったとあります。

しかし、リベルテンの会堂に属する人たちは絶対にステパノの言い分を認めようとしません。徹底的に自分が正しいと言い張ります。それだけではなく、いろいろな人たちを扇動して逮捕させ、裁判の席に着くと、今度は偽りの証言者を立ててステパノを追いつめていきます。

3 ステパノ

1) 迫害の中であって

そのステパノがどのように応じていったのかは、次回から詳しく見ますが、今日は核心部分だけ触れておきます。彼はユダヤ人が信じているモーセ五書や、ダビデを取り上げてからこう言いました。「あなたがたはいつも聖霊に逆らっているのです。いまあなたがたは、この正しい方（イエス・キリスト）、を裏切る者、殺す者となりました。あなたがたは御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

(7章51～53節要約)

ステパノは食事配給部門の責任者です。普通ならこんな場合どうするのでしょうか。「私は担当部門が違うので、詳しいことは使徒たちに聞いてください」と言って、問題をたらい回しにすることができたでしょう。しかし彼はそうしません。自分が信じていることがらを自分の口で証ししていきます。その結果、人々の怒りを買って殺されてしまいます。そのようにして初代教会の最初の殉教者となります。

なぜそこまでするのでしょうか。あるいは、できたと言った方が良いでしょう。彼は信仰と聖霊に満ちていたとあります。そこに目を留めていきます。

2) 信仰に満ちていた

まず彼の信仰から。どんな信仰でしょう。ペテロが語っていたことばにヒントがあります。3章29, 30節。「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。それは、主の御前から回復のときが来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。」

教会に来れば、罪を悔い改めて神に立ち返りなさい、と言われます。悔い改めれば、いたい私たちに何が起きるのでしょうか。受洗はしたけれど、依然として罪は私たちのうちにあって良くないことを繰り返しています。依然として自分は汚れたままです。目の前の問題がば一つと解決するわけでもありません。そのとおり。今の自分だけ見るなら、ほとんど何も変わっていない。

しかし、聖書はどこを見るようにと語っているか。「主の御前から回復のときが来て」とあります。メシヤである主イエスが再び来られる再臨の日のことです。今だけ見ていたなら、私たちは結局死ぬのですから希望はありません。しかし、回復のときが来るということです。主イエスは、その日が訪れるまで父なる神の右におられると言うのです。その日を待ち望みなさいと言われます。

でも主は本当におられるのでしょうか。どうやってそのことがわかるのでしょうか。

3) 聖霊に満ちていた

ステパノは聖霊に満ちていました。いったいその聖霊はどこから来たのでしょうか。イエスは天に上げられる直前に言われました。「わたしは、わたしの父の約束してくださ

たものをあなたがたに送ります。」(ルカ 34 章 49 節) 父なる神の手から聖霊を受けられた主が送ってくださった。ステパノが、聖霊の力によって人々の間で不思議なわざとするしを行うのです。主が天におられることがよくわかりました。ですから、その方が再び来られるということは信じる以上に当たり前のことと思っています。

回復のとき。その日、死は滅び、本当のいのちを得る日です。それを見ているので死はおそれる必要はない。それが彼の信仰でした。

ステパノのようにきっぱりと信じられるのならどんなに幸せかと思えます。私たちは、目の前のことばかりしか見えなくて、先のことは見えない。それで一喜一憂しておもわずらっています。すぐにはステパノのようにはなれないかもしれません。

でも二つのことは言えるのかもしれませんが。一つ目。私たちの大先輩たちは死ぬことを恐れずにキリストを証ししていた。今は自分には無理だと思っけていても、いつか必ず死を目の前にする日が来ます。そうしたらステパノを思い起こして、励ましを受けることができます。

二つ目。ステパノは一人でがんばったのではありません。彼は聖霊に満たされていました。だったら私たちもおなじではないですか。イエスは言われました。「天の父は、求める者に聖霊を与えてくださる。」(ルカ 11 章 13 節)

一人でがんばるのではない。気落ちしてしまいそうな私たちがなお、その日のことを信じて待つことができるよう、聖霊が励ましてくださっています。そのことに感謝したいと思えます。